HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ブリヤート語の「分詞」の機能について ： 屈折的形容詞化と位置づけられるか
Author(s)	山越, 康裕
Citation	北方言語研究, 3, 25-40
Issue Date	2013-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/52597
Type	bulletin (article)
File Information	03_YAMAKOSHI.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北方言語研究 3:25-40（北方言語ネットワーク編，北海道大学大学院文学研究科，2013）

［特集　動詞屈折形式］

ブリヤート語の「分詞」の機能について
―屈折的形容詞化と位置づけられるか―

山 越　康 裕
（札幌学院大学）

1. はじめに

モンゴル諸語の動詞の屈折形式は、伝統的に「定動詞」「形動詞」「副動詞」の三つに分類し、記述されてきた。本稿で扱うブリヤート語[1]も同様にこの三つの形式に分類されている。しかしながら、形式と機能とが対応している近隣のサハ語（本特集江畑論文）とは異なり、とくに形動詞（以下、分詞[2]と呼ぶ）にさまざまな機能がある点が特徴的である。そこで本稿では、動詞屈折形式の全体を概観したうえで、ブリヤート語の分詞の多機能性を示し、その機能が形容詞の機能に類似しているが、厳密には形容詞化とはみなせないことを指摘する。以下、2節では動詞形態法の概要を示す。続いて3節では定動詞、4節では分詞、5節では副動詞の形式と用法を概観し、6節で動詞屈折形式における形式と機能が対応していないことを指摘する。そのうえで7節では 1) 派生と屈折の区別、2) 形式と機能の非対応という二つの問題点について分析し、ブリヤート語の分詞を機能面から定義できるのかどうか検討する。

2. 動詞形態法の概要

ブリヤート語の動詞語幹は、屈折接辞（定動詞接辞類、分詞接辞類、副動詞接辞類のいずれか）を必ずともなう[3]。屈折接辞の後には、否定接辞が接続したり、主語の人称・数を

---

[1] 本稿は日本言語学会第 144 回大会ワークショップ「東アジア接尾辞型諸言語における動詞屈折形式 : 分詞に関する問題を中心に」における発表にもとづくものである。本稿で扱うデータは、中国内蒙古自治区で使用されるシネヘン・ブリヤート語（話者約 6,000 人）のものである。データの収集・分析を目的とした現地調査は、2010（平成 22）-2012（平成 24）年度日本学術振興会科学研究費補助金（若手研究 (B)）「モンゴル系危機言語であるシネヘン・ブリヤート語の総合的記述」（#22720163）の助成を受け、2010 年夏季・2011 年春季・2012 年春季に中国内蒙古自治区呼倫貝爾（フルンボイル）市鄂温克（エウェンキ）族自治旗錫尼河蘇木（シネヘン村）にて実施した。言語コンサルタントとして、ドガルマー氏（80 代女性）、ドンドク氏（40 代男性）、テムセル氏（40 代男性）をはじめとするシネヘン村在住の母語話者の方々にご協力いただいた。用例はおもにテキスト・日常会話・作例によって得たものである。テキストについては、その出典元を示す。シネヘン・ブリヤート語の文法構造は、ブリヤート語を対象とする多くの文法書で主要方言とみなされている、ロシア・バイカル湖東側に分布する「ブリヤート語ホリ方言」とほぼ同じと考えてよい。基本語順は S-O-V、Dependent-Head で、文中では非主節が主節に先行する。名詞の格変化・動詞の屈折は接辞の接続によっておこなわれる。後述するが、形容詞は名詞類の下位範疇とみなされる、形容詞名詞型の言語である。なお、ブリヤート語を含む北部モンゴル諸語の接辞（および一部の接語）は、host となる語幹の母音に応じて母音の音価がかわる（＝母音調和の法則）。母音調和の法則による交替形の数を、下付き数字であらわす。音韻・文法概略は Yamakoshi (2011) を参照されたい。

[2] 日本におけるモンゴル諸語研究においては、伝統的に「形動詞」と呼ばれているが、本特集では連体節述語として機能する動詞の屈折形式を「分詞」として呼び方を統一しているため、これにならう。

[3] ただし屈折接辞が接続していないとみなされる形式がある。(i) 2 人称単数希求法、(ii) 動詞の反復表現の前部要素の二つである。このうち 2 人称単数希求法は、動詞屈折のパラダイムを考えるとゼロ接辞をともなうと考えるのが分析上妥当であると考える。反復表現の前部要素については例外的に屈折接辞を

標示する接語が後接することがある（品詞分類上、「接語」はすべて「小詞」とみなす）。態やアスペクトにかかわる接辞は、動詞語幹を形成する派生接辞としてみなされる（これら派生接辞は義務的要素ではない）。概要を表 1 に示す。

動詞に後接する人称小詞は、文末では述語人称小詞が、文中では所有者人称小詞がそれぞれ後接し、節内部の主語の人称・数を標示する。述語人称・所有者人称両形式のパラダイムは表 2 の通りである[4]。表 1 に示した通り、定動詞希求法・副動詞には人称小詞を後接しない形式もある。なお､名詞が文末述語となる場合には名詞に述語人称小詞が後接する。

[表1] 動詞形態法の概要[5]

動詞語幹-			-屈折形式		
	(-派生-)		**-屈折**	(-否定接辞)	(=人称小詞)
	(-ヴォイス等-)	(-PROG/PFV-)			
動詞語根-	-CAUS- -PASS- -RCP- 他	-PROG- -PFV-	**-定動詞** **-分詞** **-副動詞**	-NEG ※定動詞直説法および分詞に接続	=PRED =POSS ※一部の希求法・副動詞には接続しない

[表 2] 人称小詞のパラダイム（述語人称・所有者人称）

述語人称	単数	複数
1 人称	$=b^j$~$=bi$~$=b$	$=bd^ja_3$
2 人称	$=s^j$~$=s^ja_3$	$=t$~$=ta_3$
3 人称	ゼロ	$=d$

所有者人称	単数		複数
1 人称	$=m(ni)$		$=mnai_2$
2 人称	$=s^j(ni)$	$=tni$（敬称）	$=tnai_2$
3 人称	$=ni$（単複の区別なし）		

以下、定動詞・分詞・副動詞のそれぞれについて、接辞の種類と用法を確認していく。

ともなっていないと考えているが、両ケースともにどのように記述すべきかは、今後さらに検討する必要がある。

(i) *buu* ***bai-ø,*** *ende.*
PROH いる-2SG:OPT ここに
「いてはならぬ、ここに」[AX.29]

(ii) ***jab*** *jab-ahaar* *zuun* *xɔitɔ* *zug-ii* *bar^j-aad=le...*
行く 行く-CVB.CONC 東 北 方角-ACC 捕る-CVB.PFV=FOC
「進みに進み続け、東北の方角へ向かって…」[AO.35]

[4] 2 人称複数述語人称小詞は 2 人称単数敬称としても用いられる。また、3 人称複数述語人称小詞 $=d$ の接続は任意である。筆者の収集したテキスト内では $=d$ が用いられている例はごくわずかである。その他の述語人称小詞も、モダリティをあらわす文末小詞が用いられる場合にはあらわれないことがある。

[5] カッコ内の要素は任意であらわれる。また、ヴォイスにかかわる接辞は、一つの動詞語幹に複数接続することもある (iii)。

(iii) *bar^j-a-lda-gd-ool-s^{j}x^{j}ɔ-ɔɔ.*
つかむ-E-RCP-PASS-CAUS-PFV-PTCP.IPFV
「（第三者が誰かとだれかを）取っ組みあわせた」[Yamakoshi 2011: 148]

進行・完了アスペクト（-PROG-, -PFV-）は、5.2 注 8 で後述するようにもともとは副動詞#動詞語幹による複合表現の、副動詞接辞#動詞語幹部分が融合し、接辞化したものである。

3. 定動詞接辞と定動詞の用法

定動詞接辞には大きく分けて直説法と希求法の2種類がある。直説法は三つの時制（過去・現在・未来）を区別し、希求法は人称・数などに応じて9種類の形式がある（表3参照）。

[表3] 定動詞接辞の形式

<table>
<tr><td>直説法接辞</td><td>過去
-ba_3(=PRED)</td><td>現在
-na_3(=PRED)</td><td>未来
-ooz^ja_2(=PRED)</td></tr>
<tr><td rowspan="6">希求法接辞</td><td colspan="2">1人称（包括？）
-jaa_4〜-ji</td><td>1人称（除外？）
-hoo_2(=PRED)</td></tr>
<tr><td colspan="2">2人称単数
-ø（ゼロ）</td><td>2人称複数
-$gtii$</td></tr>
<tr><td colspan="2">2人称未来
-$aarai_4$</td><td>2人称複数未来[6]
-$aaragtii_4$</td></tr>
<tr><td colspan="3">2人称
-ii(=PRED)</td></tr>
<tr><td colspan="3">3人称
-g</td></tr>
<tr><td colspan="3">願望
-hai_3</td></tr>
</table>

表3に示した定動詞はいずれも常に主節述語として用いられ、直説法と一部の希求法（1人称 -hoo_2 および2人称 -ii）では述語人称小詞によって主語の人称・数が義務的に標示される。このとき、ゼロは3人称をあらわす。また、直説法の否定は屈折接辞の直後（述語人称小詞の直前）に、否定接辞 -gui を接続してあらわす(1)。なお、直説法過去・直説法未来は会話においてほとんど用例がない。過去時制や未来時制をあらわす場合は、定動詞ではなく分詞が主節述語として用いられる（4.3参照）。

(1) *bii* ***ɔs^j-nɔ-gui=b^j***.
1SG:NOM 着く-FIN.PRES-NEG=1SG
「私は行きません」[日常会話より]

4. 分詞接辞と分詞の用法

動詞語幹に分詞接辞が付加したものを分詞とよぶ。分詞は、連体節述語・名詞節述語としてはたらくほか、主節述語としても用いられる。また4.4および7.2.1で後述するように、

[6] 2 人称複数希求法未来は、2 人称単数希求法未来 -$aarai_4$ に 2 人称複数希求法 -$gtii$ が接続した形式と分析できる。通常は一つの動詞語幹に対し、一つの屈折接辞しか接続しないのだが、この形式のみ、屈折接辞が二重に接続しているということになる。-$aarai_4$ をアスペクトにかかわる派生接辞とみなす考え方もできるかもしれないが、仮にそうだとすると、-$aarai_4$ が接続した動詞語幹に -$gtii$ 以外の他の屈折接辞が接続しない理由を説明できない。

一部が付属的要素をともなって副詞節述語としても用いられる場合がある。否定の場合は定動詞直説法同様、分詞接辞の直後に *-gui* を接続する。

ブリヤート語の先行記述では7ないし10種類の分詞接辞（e.g. Skribnik 2003では完了 *-han*$_3$、不完了 *-aa*$_4$、未来 *-xa*$_3$、習慣 *-dag*$_3$、行為者 *-aas*^{j}*a*$_4$, *-gs*^{j}*a*$_3$（2種類の形態素あり）、結果 *-aŋxai*$_3$、受動 *-aatai*$_3$、可能性 *-xaar*$_4$、適性 *-maar*$_4$）が認められている。ただしこれらの形式の脱動詞化と名詞化の程度を分析した山越 (2012a) では、このうちの行為者 *-gs*^{j}*a*$_3$、結果 *-aŋxai*$_3$、受動 *-aatai*$_3$の三つを統語的派生と認めるべきだと主張し、また副詞節を形成する可能性 *-xaar*$_4$[7]、適性 *-maar*$_4$ についてはどう扱うべきか検討を要するとした。その結果、表4の五つを分詞（山越2012aにおいては「形動詞」）と認めた。

[表4]　分詞接辞の形式

分詞接辞	完了 *-han*$_3$(=PRED/=POSS)	不完了 *-aa*$_4$(=PRED/=POSS)	未来 *-xa*$_3$(=PRED/=POSS)
	習慣 *-dag*$_3$(=PRED/=POSS)	行為者 *-aas*^{j}*a*$_4$(=PRED/=POSS)	

以下、分詞がもつ連体節述語用法・名詞節述語用法・主節述語用法・副詞節述語用法の四つの用法を概観する。

4.1 分詞の連体節述語用法

分詞が連体節述語として機能する際、分詞に修飾される名詞（以下、主名詞）が連体節内の主語に相当するときには、(2) のように分詞にも主名詞にも主語の標示はされない。一方、主名詞が連体節の主語に相当しないとき、(3) のように主名詞には連体節の主語の人称・数に対応する所有者人称小詞が後接する。ただし、この所有者人称小詞による人称・数の標示は義務的ではない。また、節内部の主語は、人称代名詞が主語の場合は義務的に、普通名詞が主語の場合は任意で属格となる(3)。

(2)　***murge-ld-ɵɵs*^{j}*e***　　*is*^{j}*egen.*
突く-RCP-PTCP.AGT　子ヤギ
「突き合う子ヤギ」[Poppe 1960: 67]

(3)　*minii*　　***bis*^{j}*-hen***　　*zax*^{j}*dal-ii=**m**...*
1SG.GEN　書く-PTCP.PFV　手紙-ACC=**1SG:POSS**
「私の書いた手紙を...」[作例]

[7] Skribnik (2003: 115) はこの可能性 *–xaar*$_4$ について、他のモンゴル諸語では副動詞に分類されていると述べている。それと同時に、Skribnik (2003: 116) は本稿 5 節表 5 に示すように目的副動詞接辞として *–xaar*$_4$ を認めている。Skribnik (2003) には両者が同一の形態素かどうかについての言及はないが、機能および意味の違いから、同一の形態素をそれぞれ別の屈折形式とみなしているものと推測される。

4.2 分詞の名詞節述語用法

名詞節の述語として機能する際には、所有者人称小詞が後接し、節内部の主語の人称・数を標示する (4)(5)。ただし、主節主語と名詞節の主語が同一の場合で、かつ名詞節が斜格（主格以外の格）である場合には、所有者人称小詞ではなく再帰所有接辞が付加される (6)。節内部の主語は連体節の場合同様、属格であらわれることが多いが、普通名詞は主格であらわれることもある。なお、(5)(6) のように完了分詞・未来分詞がさらに与位格接辞をともなうと、時をあらわす副詞節の述語として機能する。これはサハ語の分詞中立時制に分格接辞が接続し、時・条件をあらわす副詞節の述語として機能する用法（江畑論文 (7)(8)）に似ている。

(4) *erlig xaan-ai* *zaaldagan* *lab-tee* *unen#bis^{j}e* ***ge-x-ii=n***
閻魔大王-GEN 訴え:NOM たしか-PROP 真#否 という-PTCP.FUT-ACC=3:POSS
s^{j}alga-z^{j}a *ug-x-ein* *tulөө* *xan sagaan teŋger^{j}* *baisaa-xa*
検証する-CVB.IPFV 与える-PTCP.FUT-GEN ために 善なる天神:NOM 審理する-PTCP.FUT
bɔl-ɔɔ.
なる-PTCP.IPFV
「閻魔大王の訴えが嘘か真かということを検証するために、善なる天神が審理することになった」[山越 2002: 125]

(5) *tende* ***ɔs^{j}-xɔ-dɔ=mni*** *tere* *ugui=hen.*
そこに 着く-PTCP.FUT-DAT=1SG:POSS 3SG:NOM いない=PFV
「そこに私が着いたときに、彼はいませんでした」[日常会話より]

(6) ***jab-xa-d-aa*** *en-iiji* *abaas^{j}.*
行く-PTCP.FUT-DAT-REFL これ-ACC 持っていく(2SG.OPT)
「（お前自身が）行くときに、（お前は）これを持っていけ」[作例]

4.3 分詞の主節述語用法

表 4 の接辞をともなった動詞はすべて、主節述語としても機能する。定動詞の主節述語用法とのあいだに意味の違いがあるかどうか、現時点では明らかではない。主語は主格であらわれ、述語人称小詞によって主語の人称・数を標示する。不完了 *-aa$_4$* が主節述語となる際は過去時制をあらわす (7)。とくに過去時制・未来時制にかんしては定動詞直説法よりも使用頻度が高い。

(7) *abga* *axai-d-aa* *zax^{j}dal* ***bis^{j}-ee***=*b^{j}.*
伯父 兄-DAT-REFL 手紙:INDF 書く-PTCP.IPFV=1SG
「私は伯父に手紙を書きました」[山越 2006: 165]

4.4 分詞の副詞節述語用法

分詞が付属的要素をともなって副詞節述語として機能するケースがいくつか確認される。上掲(5)(6) のように格接辞をともなう場合、条件小詞 *=haa* を後接する場合、完了分詞 V-*han*$_3$ と未来分詞 V-*xa*$_3$ が所有者人称小詞を後接した場合などである。これらの用法については 7.2.1 で後述する。

5. 副動詞接辞と副動詞の用法

動詞語幹に副動詞接辞が接続したものを副動詞とよぶ。副動詞には副詞節用法と、他の動詞と組み合わせて用いる動詞修飾用法（5.2 にて後述）があるほか、一部に連体節用法が認められる。副動詞とみなされる形式も分詞同様に種類が多く、また先行記述によってその数もまちまちである。たとえば Skribnik (2003: 116) は表 5 の 12 種の副動詞接辞を認めている。副動詞の一部は、所有者人称小詞、もしくは再帰所有接辞 *-aa*$_4$ をともない、主語の人称･数を標示する。なお連結副動詞のみ、否定接辞 *-gui* を接続することができる。

表 5 にあげた副動詞のうち、太字で示した連結・不完了・完了・継続の四つは動詞修飾用法と副詞節用法で、他の副動詞はもっぱら副詞節用法で用いられる。日常会話やテキストにおいては、譲歩・条件・同時・随伴・結果副動詞はほとんど確認されていない。ただし作例では許容されている。

[表5]　副動詞接辞の形式（Skribnik 2003: 116をもとに作成）

副動詞接辞	**連結** ***-an*$_3$**	**不完了** ***-z^{j}a*$_3$**	**完了** ***-aad*$_4$**	譲歩 *-bs^{j}e*	意図 *-xajaa*$_4$	結果 *-ŋxaar*$_4$
	条件 *-bal*$_3$(=POSS)		目的 *-xaar*$_4$(=POSS)		**継続** ***-ahaar*$_4$**(=POSS/-REFL)	
	限界 *-tar*$_3$(=POSS/-REFL)		同時 *-msaar*$_4$(=POSS/-REFL)		随伴 *-xalaar*$_4$(=POSS/-REFL)	

※上段は所有者人称小詞・再帰所有接辞を後接しない。中・下段はそれら人称を示す形態素を後接しうる。

続いて、副詞節述語用法・動詞修飾用法それぞれを概観する。

5.1 副動詞の副詞節述語用法

表 5 にあげた接辞が接続した副動詞は、すべて副詞節述語として機能する。表 5 の中・下段に示した 6 種類の副動詞には所有者人称小詞または再帰所有接辞が後接し、主語の人称・数を標示する (8)。

(8)　*ii-g-eed*　***jab-ahaar=in***　*tere*　*xolagais^{j}an*　*tere*　*nege*
こうする-E-CVB.PFV　行く-CVB.CONC=3:POSS　その　強盗:NOM　その　一
gazar-ai　*xaan*　*bɔl-s^j-ɔɔ*　*ge-ne.*
地-GEN　王:NOM　なる-PFV-PTCP.IPFV　という-FIN.PRES

「こうして話が進み、その強盗はそのとある土地の王となったそうな」[EU.49]

5.2 副動詞の動詞修飾用法

連結 *-an*$_3$、不完了 *-z*^{j}*a*$_3$、完了 *-aad*$_4$、継続 *-ahaar*$_4$ が接続した副動詞は、他の動詞に先行して「副動詞＋動詞」という複合動詞句を形成する[8]。これを本特集の他言語の呼称にならい動詞修飾用法と呼ぶことにする。4 種の副動詞とその他の動詞との組み合わせの例は多様である。以下、その一例をあげる。

e.g. V-*z*^{j}*a*$_3$*#uz-* [V-CVB.IPFV#見る-]「～してみる」
bood-an#al- [撃つ-CVB.CONN#殺す-]「撃ち殺す」
ir^j*-eed#bai-* [来る-CVB.PFV#いる-]「（すでに）来ている」
jab-ahaar#bai- [行く-CVB.CONC#いる-]「進み続けている」

5.3 副動詞の連体節述語用法

目的 *-xaar*$_4$ が接続した形式が連体節述語となる、つまり分詞的にふるまう場合がある（Skribnik 2003: 115 はこの分詞的にふるまう *-xaar*$_4$ を「可能性分詞」とみなしている）。そのためこの *-xaar*$_4$ を副動詞接辞とみなすべきか、または分詞接辞とみなすべきかという問題がある。これについては 7.2.2 で後述する。

6. 動詞屈折形式・概括

以上 2 節からみてきたように、動詞語幹は屈折接辞を必ずともなう。形式と機能のおおよその対応は表 6 のとおりである。

[表 6] ブリヤート語の動詞屈折形式と機能の対応

<table>
<tr><td>定動詞</td><td colspan="4"></td></tr>
<tr><td colspan="3">分詞</td><td colspan="2"></td></tr>
<tr><td colspan="3"></td><td colspan="2">副動詞</td></tr>
<tr><td>主節述語</td><td>名詞節述語</td><td>連体節述語</td><td>副詞節述語</td><td>動詞修飾</td></tr>
</table>

すなわち A) 定動詞は主節述語としてのみあらわれる（ただし直説法の使用頻度は低い）、B) 分詞は連体節・名詞節・主節述語となるほか、一部が副詞節述語となることもある、C) 副動詞はもっぱら連用成分（副詞節述語・動詞修飾）として機能するほか、目的 *-xaar*$_4$ が連体節述語となることがある。つまり、一部の分詞が（本来、副動詞の機能と考えられる）副詞節述語用法をもち、その一方で副動詞に分類される目的 *-xaar*$_4$ が（Skribnik 2003 のいう「可能性分詞」として）連体節述語用法をもつ。この点で、ブリヤート語の動詞屈折形式を機能面から明確に区別することは難しいといえる。

[8] 表 1 で示した「進行・完了アスペクト」も、不完了副動詞接辞-*z*^{j}*a*$_3$ に、存在動詞 *bai-*「いる」や、動詞 *ɔrx*^{j}*-*「捨てる」の語幹がそれぞれ融合し、接辞化したものと分析できる（進行-*z*^{j}*ai-* < -*z*^{j}*a*$_3$+*bai-*；完了-*s*^{j}*x*^{j}*-*

ただし、定動詞にかんしては主節述語としてしか用いられない。その点で、定動詞とそれ以外の屈折形式とを区別することができる。つまり、ブリヤート語では定動詞と準動詞（分詞および副動詞）が主節以外の節で用いられるか否かによって区別できるため、この分類が有効だといえる。

その一方で、分詞と副動詞の間で機能が重なっている形式がある。また屈折形式である分詞と派生（出動形容詞・出動名詞）との区別も問題となる。そこで次節ではこれらの問題について検討する。

7. 分詞をめぐる問題

本節では、1) 分詞が出動形容詞・出動名詞とどのように区別できるのか、2) 分詞の副詞節述語用法や副動詞の連体節述語用法のように、屈折形式と機能とが対応しないケースではどのような特徴がみられるのか、という 2 点について分析していく。

7.1 出動形容詞・出動名詞との区別

山越 (2012a: 97) で指摘するように、ブリヤート語の分詞と形容詞はよく似た特徴を有する。

ブリヤート語やモンゴル語といったモンゴル諸語の形容詞は、「名詞的性格」（風間 2003: 293-294）をもつ。形容詞は名詞類の下位範疇とみなされ（e.g. Poppe 1960: 75-76, Yamakoshi 2011: 144）、形容詞と名詞との間に明確に境界線を引くことは、少なくとも形態的特徴からは困難である[9]。形容詞語幹・名詞語幹に接続する派生接辞はほぼ共通しており、形容詞は名詞と同じように格接辞をともない、名詞句（節）をつくる。

つまり、形容詞と分詞とは機能面で 3 点の共通する特徴をもつということになる。1) 格接辞をともない、名詞句（節）をつくる、2) 連体修飾をおこなう、3) 主節述語としても機能するという 3 点である。Haspelmath and Sims (2010: 257) は “An inflectional V → A transposition is called a **participle** in many languages”（**太字箇所**も含め、原文ママ）と述べ、分詞は屈折的な形容詞化であり、動詞の統語的特徴（とくに項構造）を失っている出動形容詞とは異なり、動詞的特徴を一定程度残したまま形容詞の特徴が加わった形式だと指摘している。ブリヤート語の分詞の機能が形容詞と類似している点は、この Haspelmath and Sims (2010) の指摘にあてはまる。ただし 7.2.1 で述べるように、ブリヤート語の分詞と形容詞は完全に同じふるまいを示すわけではない。さらにブリヤート語には統語的機能を比較的強く残し、項構造を保持するような出動形容詞・出動名詞もある。

山越 (2012a) では、Malchukov (2006) が提案する Decategorization / Recategorization という観点から、先行記述でいわゆる分詞に分類される各形式の脱動詞化と名詞化の程度を分析し、Skribnik (2003) などの先行記述で分詞接辞とみなされている行為者 *-gsʲa*$_3$、結果 *-aŋxai*$_3$、受動 *-aatai*$_3$ の三つの接辞を屈折接辞（＝分詞接辞）ではなく「統語的派生接辞」とみなすのが妥当であると指摘した。この統語的派生をおこなう接辞類によって派生した

< *-zʲa*$_3$*+ɔrxʲ-*）。

[9] Skribnik (2003) には形容詞にかんする記述がない。

語は、名詞・形容詞的性格が強い反面、項構造を保持する。(9) が統語的派生による出動名詞、(10) が分詞の例である。

(9) *xʲɔnɔɔ* ***uze-gsʲe-d*** *xedii* *bai-g-aa=b.*
映画:INDF 見る-NMLZ-PL いくつ いる-E-PTCP.IPFV=Q
「映画の観客はどれくらいいた？」[山越 2012a: 100]

(10) *xʲɔnɔɔ* ***uze-hen=in*** *ɔlɔn* *bai-g-aa.*
映画:INDF 見る-PTCP.PFV=3:POSS 多い いる-E-PTCP.IPFV
「映画を見たのはたくさんいた」[作例]

(9)(10) ともに、不定対格であらわれている目的語を出動名詞・分詞（太字で示した語）がそれぞれ支配している。この点では双方とも動詞性を強く保持している。しかし、(9) は複数接辞を後続するのに対し、(10) には複数接辞があらわれていない。複数接辞は名詞語幹末に接続する派生接辞だが、分詞には接続しない。この点で分詞のほうが名詞化の度合いが小さい。この他、動作の結果をあらわす *-aŋxai*$_3$、結果状態+受動をあらわす *-aatai*$_4$ が同様に目的語を支配する。しかしこれらは分詞よりも脱動詞化・名詞化の度合いが強いことから、「統語的派生名詞・形容詞」に含めるべきと山越 (2012a) では提案した。

この 3 種の接辞に共通するのは、動詞に接続する否定接辞 *-gui* を接続できないという点である(11b)。接辞 *-gui* は動詞に接続する際には「～しない」という動作の否定をあらわす一方、名詞に接続すると「～無しの」という「欠如」の意味をあらわす。3 種の接辞のうち、*-gsʲa*$_3$ はこの接辞 *-gui* を接続することができる (12)。しかしこの場合、*-gui* は動作の否定ではなく「欠如」をあらわす。さらに、この V-*gsʲa*$_3$*-gui* の形式は名詞項をとることがない。そのため、*-gui* が接続する V-*gsʲa*$_3$ は名詞と判断できる。

(11) a. *idʲeeluul-deg-gui=sʲ* *moo.*
食事させる-PTCP.HBT-NEG=2SG:POSS 悪い
「お前が（第三者に）食事させないことが悪い」[山越 2012a: 99]
b. **nɔxɔi* *oj-aatai-gui-da.* < *nɔxɔi* *oj-aatai-da.*[10]
犬:NOM つなぐ-ADJLZ-NEG-DAT 犬:NOM つなぐ-ADJLZ-DAT
「犬がつながれているところに」

(12) *uze-gsʲe-gui* 「観客がいない」（「見ない人」のような解釈はない）
見る-NMLZ-NEG

この否定接辞 *-gui* の接続可否、つまり mood を保持しているか否かが分詞と出動名詞・

[10] 「つながれていないところに」と表現する場合には、*oj-aatai-gui-da* ではなく *oj-aa-gui-da* (つなぐ-PTCP.IPFV-NEG-DAT) とする必要がある。

出動形容詞とを分ける一つの基準となると考える。

7.2 副動詞と分詞にまたがる用法

4.4 および 5.3 で指摘したように、分詞が副詞節述語として機能する例、副動詞が連体節述語として機能する例がそれぞれ確認される。そのため、副動詞と分詞とが明確に区別できるかどうかという点も問題となる。以下、それぞれの例を示す。

7.2.1 分詞の副詞節述語用法

4.2 (5)(6) で示したように、分詞は格接辞をともなって副詞節述語として機能する。ただしこの形式は、サハ語の用例（江畑論文(7)(8)）同様、意味的には副詞節だが、格接辞の接続によって副詞節用法が付与されたのであって、分詞接辞の接続によって副詞節用法が付与されたのではない、とみなすことができる[11]。格接辞をともなわずに副詞節述語となるケースとしては、以下 A, B の二つがある。この A, B には、小詞の後接という共通した特徴がみられる。

A. [分詞=条件小詞]：(13)(14)

条件小詞 *=haa* をともなった分詞（5 種すべて）が、条件をあらわす副詞節の述語となる。主節と副詞節の主語が異なる場合、条件小詞のあとに所有者人称小詞が後接する (14)[12]。副詞節をブラケット [ ] で示す。

(13) *bii* *[zam* ***hor-han=haa]*** *tөөr^{j}-xe-gui=hen=bi.*
1SG:NOM 道:INDF 尋ねる-PTCP.PFV=COND 迷う-PTCP.FUT-NEG=PFV=1SG
「[道を尋ねていたら]私は迷わなかったのに」[山越 2006: 173]

(14) *[bii* *s^{j}am-tai* *sog-t-aa* *jab-xa-gui* *ge-z^{j}e*
1SG:NOM 2SG-COM 一緒-DAT-REFL 行く-PTCP.FUT-NEG という-CVB.IPFV
xel-ee=haa=mni] *s^{j}ii* *jun* *ge-z^{j}e* *hana-xa=b=s^{j}a.*
話す-PTCP.IPFV=COND=1SG:POSS 2SG:NOM 何 という-CVB.IPFV 思う-PTCP.FUT=Q=2SG
「[もし私が君と一緒に行かないと言ったら]どう思いますか」[山越 2006: 174]

条件小詞は、分詞以外では名詞類（名詞・形容詞など）に後接する(15)。そのため、分詞それ自体は名詞節述語として機能しているとも考えられる。つまり、この形式も格接辞の接続同様、条件小詞が後接することで副詞節用法が付与されたと考えるのが妥当だろう。

---

[11] 表 5 の目的副動詞 *-xaar$_4$* は未来分詞に具格接辞（*-aar$_4$*）、意図副動詞 *-xajaa$_4$* は未来分詞にかつての位格接辞（**-jaa$_4$*）がそれぞれ接続した形式であり、与位格接辞が接続した形式と同じく格接辞の接続によって副詞節用法が付与された形式といえる。これらを副動詞接辞に含めるべきか、それとも「分詞-格」と分析すべきかは今後検討する必要があるが、ひとまず本稿では副動詞接辞としてあつかう。

[12] 主節と副詞節の主語が同一の場合は、小詞や再帰所有接辞は接続しない。条件副動詞 *-bal$_3$* も同様に、主節と副詞節の主語が異なる場合のみ、所有者人称小詞を後接する。

(15) *uglөөder* *bii* ***[sulөө-tee=haa]*** *uh-ee* *zah-ool-xa=b^{j}.*
明日 1SG:NOM 暇-PROP=COND 髪-REFL 直す-CAUS-PTCP.FUT=1SG
「明日[暇があれば（私が暇持ちならば）]散髪します」[山越 2006: 174]

B. [分詞=所有者人称小詞]：(16)(17)

所有者人称小詞をともなった未来分詞および完了分詞が副詞節述語となる例が確認される。テキストおよび日常会話においては、副詞節の主語が主節主語と異なる例のみ確認しており、主節主語と副詞節主語が同一の例はみあたらない。また行為者、不完了および習慣分詞が副詞節述語となる用例もみつかっていない。

(16) *iige-z^{j}e* *ɔdɔɔ* *gɔj* *s^{j}oboon* *bɔl-ɔɔd* *[өөd-өө*
こうする-CVB.IPFV 今 美しい 鳥:NOM なる-CVB.PFV 上を-REFL
xar-xa=s^{j}ni] *am-aar* *huneh-ii=s^{j}* *ab-x-aa* *bai-na.*
見る-PTCP.FUT=2SG:POSS 口-INS 魂-ACC=2SG:POSS 取る-PTCP.FUT-REFL いる-FIN.PRES
「こうして（化け物が）きれいな鳥に変身して、[お前が上を見たら]（化け物は）くちばしでお前の魂を奪おうとしている」[XT. 68]

(17) (*ene=s^{j}e oilaad halnagui. tar^{j}x^{j}ii=n ende id^{j}eerlehen baigaa=le.*)
tii-g-eed *[tereen-ii=n* *s^{j}ax-aad* ***garga-ha=mni]***
そうする-E-CVB.PFV 3SG-ACC=3:POSS 押す-CVB.PFV 出す-PTCP.IPFV=1SG:POSS
onta-z^{j}a *bai-na* *ge-z^{j}e* *xel-ee* *ge-ne.*
寝る-CVB.IPFV いる-FIN.PRES という-CVB.IPFV 言う-PTCP.IPFV という-FIN.PRES
「（こいつ（＝赤ん坊）が泣きやまない。頭のここが膿んでいた。）そこで[（赤ん坊の）それ（＝頭の一部）を押し出したら]（赤ん坊は泣くのをやめて）寝ているんだと話したそうだ」[TT. 40]

所有者人称小詞は 5 節で述べたように一部の副動詞にも後接することから、所有者人称小詞をとりうる節がすべて名詞節であるとはいえない。つまり、この形式は分詞に格接辞（=4.2(5)(6)）や条件小詞（=7.2.1A(13)(14)）が続く場合とは異なる。ちなみに、形容詞も副詞的に動詞を修飾することができる。しかし分詞の場合とは異なり、所有者人称小詞を後接することはない (18)。7.1 で分詞と形容詞の機能が類似していることについて触れたが、副詞的用法の際のふるまいは異なるということになる。つまり、分詞を単純に「動詞の屈折的形容詞化」とみなすことはできない。

(18) *dɔlɔɔn* *baatar=s^{j}ni* ***ixe****=le*[13] *xundeluul-z^{j}ai-na* *ge-ne.*
七 勇者=2SG:POSS 大きい=FOC もてなされる-PROG-FIN.PRES という-FIN.PRES

[13] ここでは焦点化小詞 *=le* が後接しているが、コンサルタントによれば、この *=le* がなくても非文とはならないという。

「7 人の勇者はたいそうもてなされているそうな」[AO. 72]

なお、条件小詞や格接辞と同じように、所有者人称小詞も副詞節用法を付与する要素であるとも考えられる。この点については、所有者人称小詞の機能・用法をより詳細に今後分析する必要がある。

ちなみに、近隣のモンゴル語ハルハ方言にも分詞の副詞節述語用法がある（梅谷博之氏 p.c.）ことを補足として触れておく。モンゴル語ハルハ方言の場合、完了分詞 *-san*$_4$ に 2 人称単数所有小詞 *=čin'* が後接した形式[14]がその典型的な例としてあげられる (19)[15]。またこのほか分詞に小詞 *=jum* が後接し、さらに 2 人称単数所有小詞が後接した形式もある (20)。*=jum=čin'*が後接する (20) のような形式では、完了分詞以外の分詞も用いられる[16]。

(19) *[jaaral-tai nojl'-d* ***or-son=čin'****]* *nojl-ijn caas*
急ぎ-PROP トイレ-DAT 入る-PTCP.PFV=2SG.POSS トイレ-GEN 紙
baj-x-güj=bol *jaa-x=be.*
ある-PTCP.FUT-NEG=COND どうする-PTCP.FUT=Q
「[急いでトイレに入って、]トイレットペーパーがなかったらどうしますか」
[山越 2012b: 206]

(20) *[UIX zavsarla-čix-san=jum=****čin'****]* *bi tür*
国会:NOM 中断する-PFV-PTCP.PFV=MOD=2SG:POSS 1SG:NOM 一旦
čölöölö-gd-sön *ge-sen* *üg=biz=dee.*
解放する-PASS-PTCP.PFV という-PTCP.PFV 言葉=MOD=MOD
「[国会が休会してしまったので、]私は（その間）一時フリーになったということでしょ」 [Time.mn 2012: 2012-05-29]

以上のように、分詞が副詞節述語として機能していると考えられる形式においては、モンゴル語でもブリヤート語と同じく所有者人称小詞が後接する。この点ではブリヤート語の分詞による副詞節述語用法と類似している。

7.2.2 副動詞の連体節述語用法

一部の分詞が副詞節述語としてあらわれている例（副詞節述語用法）が確認される一方、先行記述で副動詞とみなされる形式が、分詞的にふるまっている（連体節述語用法）例も確認される。目的副動詞 *-xaar*$_4$ が、連体節述語となる、つまり分詞的にふるまう例であ

[14] とくに文頭で、指示動詞 *teg-* 「そうする」の完了分詞形に 2 人称単数所有小詞が後接した *tegsen=čin'* 「そしたら」という形式が、接続詞的表現として多用される。

[15] モンゴル語完了分詞 *-san*$_4$、2 人称単数所有小詞 *=čin'* はそれぞれブリヤート語の完了分詞 *-han*$_3$、2 人称単数所有小詞 *=s*^{j}*ni* に対応する。

[16] この*=jum=čin'* が副詞節述語に後接するケースは、名詞類（名詞・形容詞）が述語となっている場合もある。そのため、ブリヤート語の (5)(6)(13)(14) の例同様、分詞は名詞節述語として機能している可能性が高い。また小沢 (1986: 191) はこの小詞 *=jum* が名詞 *jum*「もの」と同じ起源である可能性を指摘している。だとすると、分詞は本来 *jum* を修飾する連体節述語として機能していたとも考えられる。

る。目的副動詞 *-xaar*$_4$の副詞節述語としての用例 (21)、連体節述語としての用例 (22) を示す。

(21) 副詞節述語としての V-*xaar*$_4$

xugz^j*e-hen* *sojil-ii* ***xurte-xeer*** *horgool*^{j}*-da* *jab-dag*
発展する-PTCP.PFV 教養-ACC 受ける-CVB.PURP 学校-DAT 行く-PTCP.HBT
bɔl-hɔn...
なる-PTCP.PFV
「近代的な素養を得るために学校に通うようになった...」[山越 2002: 119]

(22) 連体節述語としての V-*xaar*$_4$

xen-ei=s^j*e* ***magta-xaar*** *ber*^{j}*.*
誰-GEN=FOC 褒める-CVB.PURP 嫁
「誰もが褒めるような嫁」[Skribnik 2003: 115]

すでに指摘したように、Skribnik (2003) は、この連体修飾節にあらわれる形式 *-xaar*$_4$ を「可能性分詞」として分詞にも分類している。しかし、他の屈折形が形式によって分類されているなか、この形式のみ意味・機能によって分詞にも副動詞にも分類されているというのは整合性がとれない。だとすると、この *-xaar*$_4$ を分詞・副動詞いずれかに分類すべきか検討する必要がある[17]。これについては今後より詳細に検討すべきだが、*-xaar*$_4$を目的副動詞接辞と認めると、

(CVB-1) 副動詞は副詞節述語として用いられるが、名詞節述語・主節述語としては用いられない。
(CVB-2) 副動詞は連体節述語として用いられないが、目的副動詞 *-xaar*$_4$ のみ例外的に連体節述語用法がある。

ということになる。

一方、*-xaar*$_4$を可能性分詞接辞と認めると、

(PTCP-1) 分詞は連体節述語・名詞節述語・主節述語という三つの機能をもつが、可能性分詞 *-xaar*$_4$ のみ、名詞節述語・主節述語という機能をもたない。
(PTCP-2) 分詞は付属的要素をともなった場合に副詞節の述語となりうるが、可能性分詞 *-xaar*$_4$ のみ、付属的要素をともなわずに副詞節述語となる。
(PTCP-3) 分詞は否定接辞 *-gui* を接続するが、可能性分詞 *-xaar*$_4$ は否定接辞 *-gui* を接続しない (山越 2012: 105)。

[17] もう一つ、注 11 でも述べたように、この *-x-aar*$_4$ は *-x-aar*$_4$ [未来分詞-具格] として分析することも可能である。ただし、具格名詞が他の名詞を修飾するような例、つまり連体修飾している例が見あたらないため、この分析も問題が残る。これについては、今後格の機能の分析とともに検討する必要がある。

ということになる。つまり、*-xaar*$_4$ はいずれに分類しても例外的な形式ということになる。ただし目的副動詞とみなしたほうが、可能性分詞とみなすよりも「例外」を少なくできるという点では優れている。このことから、*-xaar*$_4$ をひとまず分詞接辞とはみなさず、目的副動詞とみなす。この立場に立つと「分詞以外の屈折形式は名詞節述語用法をもたない」ということになる。つまり分詞を「名詞節述語として機能しうる形式」と定義することができる。

8. まとめ

7.2をもとに、表6の動詞の屈折形式と機能の対応関係をより詳細にまとめると、以下表7のようになる。

[表7] **ブリヤート語の動詞の形式と機能**

<table>
<tr><td>定動詞</td><td colspan="4"></td></tr>
<tr><td colspan="2">行為者・習慣・不完了分詞</td><td colspan="3"></td></tr>
<tr><td colspan="3">未来・完了分詞</td><td colspan="2"></td></tr>
<tr><td colspan="2"></td><td colspan="2">目的副動詞</td><td></td></tr>
<tr><td colspan="3"></td><td colspan="2">連結・不完了・完了・継続副動詞</td></tr>
<tr><td colspan="3"></td><td>その他副動詞</td><td></td></tr>
<tr><td>主節述語
（PRED必須）</td><td>名詞節述語
（POSS必須）</td><td>連体節述語
（PRED/POSS無し）</td><td>副詞節述語
（一部形式でPOSS標示）</td><td>動詞修飾
（PRED/POSS無し）</td></tr>
</table>

これまで述べてきたように、ブリヤート語の動詞屈折形式をまず定動詞とそれ以外、つまり準動詞とにわけることは有効である。ただし準動詞に含まれる二つの屈折形式、分詞と副動詞については形式と機能が対応していない。とくに分詞の機能が多様である。この特徴は、形容詞のもつ多機能性と類似する。分詞が副詞節述語としてあらわれている例には、いずれも何らかの付属的要素（接辞／小詞）をともなっているという特徴がある。このことから、格接辞や条件小詞によって副詞節述語機能を付与されたのと同様に、所有者人称小詞も副詞節述語を形成するための重要な役割を果たしている可能性がある。その一方で、機能が類似している形容詞が副詞的に用いられる際には所有者人称小詞は必要とされない。つまり、分詞を「動詞の屈折的形容詞化」であるというように単純化することはできない。

副動詞のなかで目的副動詞 *-xaar*$_4$ のみが連体節述語用法をもつことを考慮すると、分詞を「名詞節述語として機能できる動詞屈折形式」と定義することで、三つの屈折形式を区別することは可能となる。この場合、「分詞」と「出動名詞・出動形容詞」をどのように区別するかが問題となるが、7.1 で確認したように、否定接辞 *-gui* の接続可否がその判断基準となりうる。

謝辞: 本稿執筆に際し、2 名の査読者から有益なコメントを多数いただきました。心より感謝いたします。本稿にかんする調査にご協力いただいたコンサルタントの皆様にも改めて感謝の意を表します。

略号一覧

-: 形態素境界	CONN: 連結	IPFV: 不完了	PRES: 現在
#: 語境界	CVB: 副動詞	MOD: モーダル	PROG: 進行
=: 接語境界	DAT: 与位格	NEG: 否定	PROH: 禁止
1,2,3: 人称	E: 挿入音	NMLZ: 名詞派生	PROP: 所有
ACC: 対格	FIN: 定動詞直説法	NOM: 主格	PTCP: 分詞
ADJLZ: 形容詞派生	FOC: 焦点	OPT: 希求法	PURP: 目的
AGT: 動作者	FUT: 未来	PASS: 受動	Q: 疑問
CAUS: 使役	GEN: 属格	PFV: 完了	RCP: 相互
COM: 共同格	HBT: 習慣	PL: 複数	REFL: 再帰
CONC: 継続	INDF: 不定対格	POSS: 所有者人称	SG: 単数
COND: 条件	INS: 具格	PRED: 述語人称	

出典略号（数字は各テキスト中の例文番号を示す）

AO: 2005-03-16 採録 *Altan ceez^{j}tei muŋgun bugsetei onaga.*（金の胸と銀の尻の子馬）

AX: 2005-03-16 採録 *Altan ceez^{j}tei muŋgun bugsetei xubuun.*（金の胸と銀の尻の息子; Yamakoshi 2012 収録）

EU: 2002-08-28 採録 *Er^{j}eegs^{j}e un^{j}eetei ubgen xugs^{j}en xɔjɔr.*（まだらの牛を飼う老夫婦; Yamakoshi 2012 収録）

TT: 2005-03-16 採録 *Teneg Tarib.*（おろかなタリブ）

XT: 2005-08-13 採録 *Xaanai xubuun tus^{j}melei xubuun xɔjɔr.*（ハーンの息子と役人の息子）

用例引用文献

Time.mn. 2012. “Э. Бат-Үүл: УИХ завсарлачихсан юм чинь би түр чөлөөлөгдсөн гэсэн үг биз дээ.” http://politics.time.mn/content/13160.shtml （2013 年 1 月 29 日最終閲覧）.

山越康裕. 2002.「シネヘン・ブリヤート語テキスト」津曲敏郎 (編)『環北太平洋の言語』8. 95-129.

----. 2006.「シネヘン・ブリヤート語テキスト：日常会話を題材にした基本文例集」津曲敏郎 (編)『環北太平洋の言語』13. 139-180.

Yamakoshi, Yasuhiro. 2012. Three Folktales in Shinekhen Buryat.『アジア・アフリカの言語と言語学』6. 109-136.

参照文献

Haspelmath, Martin and Andrea D. Sims. 2010. *Understanding Morphology* [2nd ed.]. London: Hodder Education Publishers.

風間伸次郎. 2003.「アルタイ諸言語の 3 グループ（チュルク、モンゴル、ツングース）、及

び朝鮮語、日本語の文法は本当に似ているのか : 対照文法の試み」アレキサンダー・ボビン、長田俊樹 (編)『日本語系統論の現在』京都: 国際日本文化研究センター, 249-342.

Malchukov, Andrej L. 2006. Constraining nominalization: function/form competition. *Linguistics*. 44(5): 973-1009.

小沢重男. 1986.『増補モンゴル語四週間』東京: 大学書林.

Poppe, Nicholas. 1960. *Buriat Grammar.* Bloomington: Indiana University Press.

Skribnik, Elena. 2003. Buryat. In: Juha Janhunen (ed.): *The Mongolic Languages.* London and New York: Routledge, 102-128.

山越康裕. 2011.「シネヘン・ブリヤート語の人称所有小詞」『北方言語研究』1. 63-78.

----. 2012a.「シネヘン・ブリヤート語の『形動詞』」『北方人文研究』5. 95-112.

----. 2012b. 『詳しくわかるモンゴル語文法』東京: 白水社.

Yamakoshi, Yasuhiro. 2011. Shinekhen Buryat. In: Yasuhiro Yamakoshi (ed.) *Grammatical Sketches from the Field*. Tokyo: ILCAA TUFS, 137-177.

On the Function of “Participles” in Buryat: Can We Define “Participles” as the Inflectional V→A Transposition?

Yasuhiro YAMAKOSHI
(Sapporo Gakuin University)

Traditionally, the verbal inflection of the Mongolic languages, including Buryat, has been classified into three inflectional classes: finite verbs, participles (in other words, “verbal nouns”), and converbs. Each class has a particular syntactic function. Finite verbs appear as predicates of main clauses, participles mainly appear as predicates of nominal and adjectival clauses, and converbs appear as predicates of adverbial clauses. However, this classification may be unsuitable since some participles also appear as predicates of adverbial clauses. This function seems to be similar to that of adjectives, which can modify both nouns and verbs. However, participles are different from adjectives. When a participle is used as the predicate of an adverbial clause, it always appears with some enclitical particles, which do not appear with adjectives that modify verbs. Therefore, we cannot define participles as inflectional V→A transposition, as suggested by Haspelmath and Sims (2010).

（やまこし・やすひろ　yamyas@sgu.ac.jp）